

中世の信仰の広がり



写真1 廣峯神社・拝殿(姫路市)

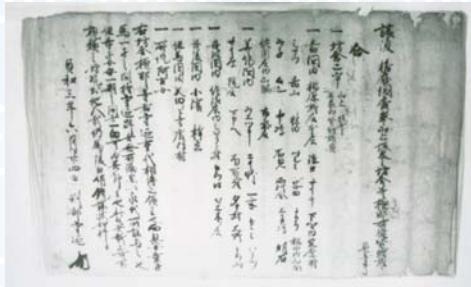


写真2 刑部守延坊舎等譲状(「廣峯文書」(『上齋原村史』より))



写真3 廣峯神社の社家・黒田家跡

兵庫県姫路市の廣峯山に鎮座する、生頭天王を祀る廣峯神社は、鎌倉時代からご利益のある神社として信仰を集め、廣峯神社のある播磨国だけではなく、但馬・丹後・備前・備中・備後・美作・因幡・摂津・丹波、現在でいえば兵庫・岡山・広島東部・鳥取東部・大阪北部・京都中部などの近隣地域にまで信者を広げていきました。

鎌倉時代から南北朝時代の廣峯神社には、約三〇家の社家があり、社家の者は「御師」として各地を巡り、神社を参詣する際には、宿坊を提供したりしていました。また、旦那は御師が来るとき宿舎や、初穂料として財物を提供しました。当時、この旦那に対する権利(旦那職)は、社家の財産として譲渡や売買も行われていました。

写真2は、廣峯神社の社家に伝わる書状です。「刑部守延坊舎等譲状」と呼ばれているもので、刑部守延といいう人物が、南北朝時代の貞和三年(一二三四七)に、自分の持つ廣峯山の建物や家財道具、そして各地の旦那職を娘の子に譲ることを示した文

がついていたことになります。

また、この書状には、サイ原・ヲクツの地名が記された最も古い史料としての価値もあります。この史料によつて、少なくとも南北朝時代頃にはすでにサイ原(才原・斎原)や奥津の地名

信者を地域単位で「旦那(檀那)」として組織し、各地

布したり、旦那が

書です。

この中に、美作国内の旦那として、

人々が集落を営んでいたことがわかれます。

「ウエツキ、ニイ野、一宮、カ、ミ、ヲクツ、サイ原、院庄、マカヘ、南賀茂、タナ村、大野、ナウ山」が挙げられています。このうち、「ヲクツ」、「サ

イ原」は、現在の奥津・上齋原・下斎原とみて間違いないでしょう。

カ、ミ(香々美)・大野・マカヘ(真加部)については、勝田・英田郡域にも古代・中世から続く同様の地名がありますので、いずれに該当するかは不明ですが、一宮・香々美・院庄・

戸時代以降の社家には黒田姓をもつ家があり、廣峯山にはその屋敷跡が残されていることからも、廣峯神社

と黒田家の深い関係がうかがえます。

また、中世の美作では、和歌山県の熊野三山を信仰する熊野信仰も盛んに、熊野那智大社文書の中には

「御先達若狭阿闍梨淨範の旦那美作国甲立・田中・越畠源六」(応永二年(一三九五))、「岡之坊の地下旦

那」(嘉吉三年(一四四三))などの記述があり、越畠や岡坊(古川)の有力者が旦那になつていていたであろうと推測されています。

交通・通信も未発達な中世の山村で、これほどのネットワークを築いた当時の人々の行動力と信仰心には、驚くべきものがあります。

参考資料:「奥津町史」、「上齋原村史」、「鏡野町史」、「津市史」、「鳥取県史」、「廣峯神社パンフレット」

生涯学習課 口下
電話(0866)54-7733